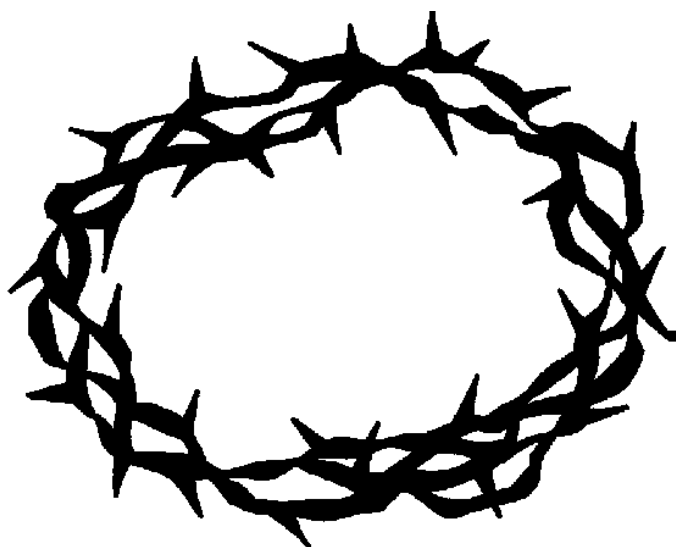


# 日々の聖句

3月 受難



## 『日々の聖句』の使い方

この冊子は聖書を読み、学び、黙想するための手引で、独立した読み物ではありません。かならず、聖書を開いてその日の箇所を読み、参照箇所も開くようにしてください。

聖書の黙想には、古代から「レクシオ・デヴィナ」という方法が用いられました。それは次の四つの段階を進んで聖書を読む方法です。英語の四つの「R」を意識するとよいでしょう。

一、読む (Read) 心を静めてゆっくりと、何回でも、聖書を読みます。聖書は、神の言葉ですから、神が語っておられる声を聞くようにして読みます。

二、黙想する (Reflect) 黙想は聖書との対話です。聖書になぜこのような言葉が書かれているのだろうか。それが自分にとってどんな意味があるのか、聖書に問

い、聖書に答えてもらおうようにして、その箇所の中心的な部分を思い巡らします。

三、祈る (Respond) この祈りは、黙想によって得られたことに対する応答の祈りです。それは悔い改めや行動に結びつく決心であるかもしれませんが、あるいは、まだ解けなかつた疑問や解決していかないことがらに対するさらなる求めであるかもしれません。それがどんなものであっても、正直に祈ることが大切です。

四、瞑想する (Remain) 祈りに続いて、しばらくの間、神とのまじわりに留まりましょう。「黙想」は「聖書との対話」ですが、「瞑想」は「神との対話」です。神の臨在の中にとどまることによって、御言葉が血肉となり、祈りが生活の中で実現していきます。「瞑想する」ことは神とのまじわりに「留まり」、自分自身を神の手に「委ねる」ことと言い換えることもできます。

おまえたちが『祝福あれ、主の御名によって来られる方に』と言う時が来るまで、決しておまえたちがわたしを見ることはない。(35)

イエスはエルサレムでご自分の死が待っていることを知っていました。それでもエルサレムに向かつて進んで行きました。しかも、イエスはエルサレムを責めるのでなく、それを抱きかかえるようにして、いつくしみを注がれました。

「めんどりがひなを翼の下に集めるように」という言葉は、「主は荒野の地で、荒涼とした荒れ地で彼を見つけ、これを抱き、世話をし、ご自分の瞳のように守られた。鷺が巢のひなを呼び覚まし、そのひなの上を舞い、翼を広げてこれを取り、羽に乗せて行くように」(申命記 32・10、11)という箇所を思い起こさせます。父なる神も、御子イエスもご自分の民を、ご自分の翼のも

とに集め、保護し、養おうとしました。しかし、ひな鳥たちは、母鳥の翼から逃げ出し、その保護と養いを斥けたのです。そのためエルサレムは、およそ四十年後、紀元七十年に破壊され、捨てられました。イエスの言葉を聞いた人々は生きている間にその実現を見ました。

では旧約時代の神の民は捨てられたままなのでしようか。その人たちもイエス・キリストの来臨の時には「祝福あれ、主の御名によって来られる方に」と言つてイエスを迎えるようになるでしょう。異邦人に伝えられた福音は巡り巡って再びイスラエルの人々にも伝えられ、ユダヤの人々も異邦人もともにひとりの救い主を迎えるようになるのです。

祈り 主よ。あなたが来られるまでに、すべての人に福音が届けられますように。

見よ、イエスの前には、水腫をわずらっている人がいた。(2)

聖書は「見よ、イエスの前には、水腫をわずらっている人がいた」と言って、読者に注意を喚起しています。イエスがこの人に特別なことをしようとしていることを予感させる言葉です。

この日は「安息日」でした。イエスの反対者たちはイエスが安息日に病気を癒やすかどうかを鵜の目鷹の目で見ていました。イエスはそれを知りながら、この病人を「抱いて」(4)癒やし、その人を家に帰しました。イエスは誰もが避けて触れなかった水腫の人をハグしましたが、それは、彼に愛とあわれみを伝えるためでした。彼は病気のため醜くなった自分の姿を恥じたり、そのため人々が遠ざかっていくのをつらく感じていたことでしょう。イエスはその力によって彼の病気を治

療しただけでなく、彼に神の愛を伝えることによってその心をも癒したのです。私たちに必要な癒しは霊肉の全人的な癒しですが、それを与えることができるのはイエスの他ありません。

反対者たちは安息日に人を癒やしたイエスを非難しようとしたが、イエスは「自分の息子や牛が井戸に落ちたのに、安息日だからといって、すぐに引き上げてやらない者が、あなたがたのうちにいるでしょうか」(5)と言って、彼らにその余地を与えませんでした。イエスにとつて、この病人もまた父なる神の子どもであり、愛され、癒やされ、救われなければならない人だったので、

祈り 主よ。醜い私たちを「子よ」と呼んで抱きしめてくださる、あなたの大きな愛を感謝します。

招いていた人たちに、『さあ、おいでください。もう用意ができましたから』と言った。(17)

15~24節で、「あの招待されていた人たち」(24)と言われているのは、イスラエルの人々のことです。彼らは「神の民」として旧約時代から「神の国」に招かれていました。「ある人」(16)とは父なる神、「しもべ」(17)はイエスのことです。父なる神は御子を「しもべ」の姿で世に遣わし、御子イエスの宣教によって神の民を神の国に招いてくださったのです。

招かれた人たちは、あらかじめその日時を知らされていたにもかかわらず、「畑を買ったので、見に行かなければなりません」「五くびきの牛を買ったので、それを試しに行くところですよ」と言って、ぎりぎりになってから招待を断りました。その招待を心に留めず、自分の予定や用件を

優先させたのです。招待を断った人たちがあげた理由はすべて言い訳でしかありません。「結婚したので…」というのなら、夫婦で一緒に行けばいいのですから。神の国への招待を断る理由など、実際は何ひとつないのです。

主人が連れてこいと言った町の大通りや路地、また、街道や垣根のところにいる人々というのは、イエスに反対する人々が「罪びと」や「異邦人」と呼んで蔑んでいた人々のことを意味します。神の国は、「私たちこそ、そこに入れるのだ」と自負していた人々から取り上げられ、自らを神の前に低くし、悔い改めて福音を信じるすべてのの人に与えられるのです。

祈り 主よ。私たちが神の国へと招いてくださり感謝します。あなたの招きをすべての人に知らせることができるよう助けてください。

まず座つてよく考えないでしようか。(31)

群衆の中には、イエスがどのようなお方で何をなさろうとしているのかを考えることもしないで、まるでファンが芸能人を追いかけるようにして、ついてきただけの人々もありました。芸能人であれば、ファンが必要で、そのためには「握手会」などのイベントをしたり、コンサートの優待券を提供したりしますが、イエスは「ファン」ではなく、最後までイエスに従う「弟子」を求めていました。それでイエスは群衆に、弟子となつて従う決意があるかどうかを問うたのです。

「塔を建てようとする人」(28～30)や「ほかの王と戦いを交えようと出て行く王」(31～32)は、「まず座つて」必要な経費を計算したり、戦略を考えたりしています。結論の出ていることは「あなたも行つて、同じようにしなさい」(同

10・37)とあるように、すぐに行動に移すべきですが、まだ決断ができていない場合には、「まず座つて」よく考えることが必要なのです。

「自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、さらに自分のいのちまでも憎まないなら、わたしの弟子になることはできません。」(26)「自分の財産すべてを捨てなければ、あなたがたはだれも、わたしの弟子になることはできません」(33)といった言葉は簡単に受け入れられるものではありません。こうした言葉に接するとき、イエスはなぜそう言われたのか、私は何をすべきかを「座つて考え」てみる必要があります。そのようにしてみこころを確信してこそ、立ち上がって確かな歩みをすることができなのです。

祈り 主よ。私たちを、あなたのお心を知つて従う者としてください。

喜び祝うのは当然ではないか。(32)

ルカ15章の三つの譬えは、パリサイ人たち、律法学者たちが、「この人は罪人たちを受け入れて、一緒に食事をしている」(2)と言つてイエスを非難したことに答えたものでした。「羊」、「銀貨」、「息子」と、それぞれに失われたものは違いますが、いずれも、失われたものを取り戻した喜びが描かれており、その喜びを誰も否定することはできません。

パリサイ人や律法学者たち、そして、彼らに代表される律法の宗教はこの喜びを知りませんでした。自分の力で律法を守り通し、その正しさによつて救われようとしても、誰ひとり、神に受け入れられるだけの正しさに到達できる人はいませんから、そこには、失望があつても希望はなく、葛藤があつても平安はなく、嘆きはあつても喜び

はないのです。「放蕩息子」の「兄」は、そうした律法の宗教を代表しています。律法の宗教は、律法を「神のみこころ」として厳格に守りながら、愛に満ちた父としての神を見失っているのです。神の愛を知らない者は、自分を正しい者とし、兄弟を憎み、不平不満の中に生きるようになります。これ以上の不幸はありません。

赦され、受け入れられるのに値しない者が、ただ恵みにより罪を赦され、父なる神に「子」として受け入れられている。ここに喜びがあります。

この喜びをもたらすのが、イエスの福音であり、それを信じる信仰です。この信仰によつてはじめ、私たちは父なる神の愛を知り、喜びに満たされるのです。

祈り 主よ。私たちが喜びの信仰へと導いてください。

主人は、不正な管理人が賢く行動したのをほめた。(8)

この譬話の「主人」は管理人によって損害を被っているのに、管理人が「賢く行動したのをほめ」ています。「賢く行動した」とはいつても、

この管理人は借用証書を勝手に書き換えるという不正を働いたので、「抜けめなくやった」(新改訳二版)というほうが分かりやすいでしょう。その「抜けめなさ」も、ここまで徹底すると、「主人」が自分がこうむった損害を忘れて、褒めるほどのものになっていたというところに、この譬話のおもしろさがあります。

ではイエスは私たちに「抜けめなく」生きるように教えているのでしょうか。いいえ、それは「この世の子ら」の生き方であって、「光の子ら」の生き方ではありません。では、イエスはこ

の譬話で何を教えようとしたのでしょうか。それは「将来に備える」ということです。不正な管理人は仕事を辞めさせられた後のことを考え、不正な方法でしたが、将来に備えました。そのように信仰者は、今の時だけを見て生きるのではなく、常に、やがて世を去って神のもとに行く霊的な備えをしていなければならないのです。

信仰者は、天に宝を蓄えるのですが、そのためには地上で任せられている富を神のためにどのように使うかの知恵が必要です。すべての信仰者は神から託されたものの「管理人」です。「不正な管理人」ではなく、「賢い管理人」となって主に仕える者でありたいと思います。

祈り 主よ。私たちに委ねられた、財産や才能などをあなたのために賢く用いる知恵を与えてください。



しばらくして、この貧しい人は死に、御使いたちによってアブラハムの懷に連れて行かれた。(22)

金持ちの名はその町の誰にも知られていなかったが、その家の前に、まるで品物のように置かれていた物乞いの名は誰にも知られていませんでした。しかし、イエスはこの物乞いをその名で「ラザロ」と呼んでいます。彼の名が天に記されるものとなったからです。

この金持ちとラザロの死後の命運を決めたものは何だったのでしよう。金持ちは生きている間良い目を見、ラザロは悪い目に遭った。だから、死後に立場が逆転したといっただけのことでありません。金持ちは自分の持っているものに頼り、神への信頼を忘れ、自分の家の前で物乞いをしていたラザロを憐れむことがなく、神への信仰と隣

人への愛を實踐しませんでした。

一方のラザロには頼るべきもの——健康も、財産も、そして家族や友人さえありませんでした。彼は世のものではなく、天を仰ぎました。それで、彼の霊は天使たちによって天へと携えあげられたのです。彼はカトリック教会では「聖ラザロ」として記念されています。ふつうは特別なことをした人が「聖人」となるのですが、ラザロは特別なことは何ひとつしませんでしたし、できま

せんでした。残り少ない地上の日々を、ただひたすらに主にすがって生きてだけです。しかし、聖書にその名が記されることによって、その信仰が証しされ、彼は、同じような境遇にある人々に励ましを与える「聖人」となったのです。

祈り 主よ。信仰に生きることによってあなたを証しし、人々を励ます者となれますように。

これらの小さい者たちの一人をつまずかせるよ  
り、ひき臼を首に結び付けられて、海に投げ込  
まれるほうがましです。(2)

「ひき臼を首に結び付けられて、海に投げ込ま  
れる。」そんなことをされたら、すぐに溺れ死  
に、首に結び付けられた縄が切れないかぎり、死  
体も浮かんでくることがありません。それは凶悪  
な暴力組織がするようなことですが、イエスはあ  
えて、そうしたことを口にしました。これはとて  
も荒々しい言葉ですが、イエスはそれによつて、  
ご自分を信じる「小さい者」を、どれだけ大きな  
愛で愛しているかを伝えようとしたのです。

ここで言う「つまずき」とは誤った教えによつ  
て人々を信仰から引き離し、罪を犯させることを  
意味します。「あなたはニコライ派の人々の行い  
を憎んでいる。わたしもそれを憎んでいる」(黙

示録 2・6)とあるように、それは後に、教会の  
中に入ってくる異端のことであると思われま

す。また、「人をつまずかせないように」という配慮  
からどんなことでも肯定してあげれば良いのだと  
いう考えがありますが、それは間違っています。

「兄弟が罪を犯したなら、戒めなさい」(3)と  
あるように、是は是、否は否として、正しいこと  
は貫かれなければなりません。けれども、それは  
何のあわれみも「赦し」もないものであつてはな  
りません(4)。悔い改めと赦しがあつてこそ、  
はじめて「つまずき」が取り除かれるのです。真  
理を守りつつ、赦しを実践していく――それは簡  
単なことではありませんが、キリストにあつては  
可能なのです。

祈り 主よ。あなたの大きな愛で私たちを「つま  
ずき」からお守りください。

使徒たちは主に言った。「私たちの信仰を増し加えてください。」(5)

「信仰を増し加えてください」と言ったのは十二名の「使徒たち」でした。イエスに従う者が増えるにつれて、使徒たちの役割は重要なものとなりました。使徒たちにはすでに悪霊を追い出し、病気を癒やす権威が授けられていましたが、他の弟子たち以上のもを必要としたのでしよう。「信仰を増し加えてください」という願いが、使徒たちが、自分の務めを果たすのに力の足りなさを覚え、もつと神に信頼し、よりよく人々に仕えたいという思いから出たものであれば、それは神に喜ばれる願いです。

しかし、使徒たちが、自分たちを他の弟子たちよりも更に「権威」あるものにしてくれるものを求めていたとしたら、それは正されなければなり

ません。イエスは、使徒たちの願いの背後にある、好ましくない動機を見てとり、下働きのしもべの話をしました。それを通して、使徒たちに、しもべになりきり、徹底して、神と人々に仕えなさいと教えました。

人々に仕えることよって人々を導くことを“Servant Leadership”と言います。どんな国でも地位のある人は権威的に振る舞うことが多いのですが、私は、アメリカの教会で、地位のある人たちも謙虚に人々に仕えている姿多く見ることができ、とても教えられました。しもべとなり、私たちに仕えてくださったイエスのように、私たちもしもべとなつて仕える。そこに信仰の成長があると、イエスは教えておられます。

祈り 主よ。しもべとなつて、あなたと人々に仕える者としてください。

十人きよめられたのではなかったか。九人はどこにいろのか。(17)

ツアラアトに冒された人たちは一般の人々に近づくことを許されなかつたので、この十人の人たちは遠くから声を張り上げて、「イエス様、先生、私たちをあわれんでください」(13)とイエスに懇願しました。イエスはその切実な願いに心を動かし、彼らを癒やしました。しかし、イエスに感謝するため戻ってきたのはそのうちの一人だけでした。他の九人は、癒やされたことを驚き、喜びはしましたが、自分たちを癒やしてくださった方を忘れてしまったのです。

イエスは自分が感謝されたいためにこの人たちを癒やしたわけではありません。それはイエスのあわれみから出た行為でした。しかし、イエスは、この癒やしを通して、この人たちがイエスと

のつながりを持つことを望んでいました。ツアラアトを癒やされた人は、もう自由に人々に近づくことができず。そのうちの一人は、真つ先に近づくべき人は、自分を癒やしてくださったイエスであると考え、イエスのもとに戻ってきました。彼は癒やしを通して「癒やし主」のもとに来て、「癒やし主」であるイエスを受け入れました。それでイエスは「あなたの信仰があなたを救ったのです」(19)と彼に言ったのです。

「かつてはわれ良きものを 求めて主を忘れた  
り 賜物より癒やしより 与え主ぞ さらに良  
き」(新聖歌 346) この賛美のように、賜物や癒やしを受けるだけで終わらず、「与え主」に賛美と感謝をささげたいと思います。

祈り 主よ。恵みや祝福を受ける時、与え主であるあなたを忘れることがありませんように。

口トの妻のことを思い出しなさい。(32)

イエスは「神の国はあなたがたのただ中にある」と言つて、その福音宣教によつて、神の国がすでに来ていると告げましたが、パリサイ人たちは、それを信じませんでした。彼らが「神の国はいつ来るのか」と言つたのは、神の国の完成の時を尋ねたというよりも、「イエスの宣教のどこに神の国の栄光があるのか、神の国の到来はどうなっているのだ」という批判の気持ちからでした。彼らはイエスが御国の王であつて、神の国がイエスと共にすでに来ていることを認めないことは、災いが迫つているとの警告を聞きながらそれを無視したノアの時代の人々や口トがいた町の人々と同じ過ちを犯すことになるのです。

イエスはここで「人の子」の受難について語っています(25)。パリサイ人たちは十字架で死ん

だイエスが「人の子」であるはずがないと結論づけましたが、イエスは、「人の子」の死に続く、復活と昇天があつてはじめて再臨があると言われました。イエスがそこを目指して進んでいる、エルサレムでの過越の祭の時こそ、終わりの時代への転換期であり、再臨のしるしなのです。

イエスの受難と復活、昇天の後、再臨はより確実なものとなりました。この時代に生きる信仰者には、過去に未練を持つことなく、ひたすらに救いの日を待ち望むことが求められています。口トの妻は滅びの町から引き出されたのに、心をそこに残し、後ろを振り向いたため塩の柱となりました。イエスは口トの妻を例にあげ、私たちに前に向かつて進むよう教えているのです。

祈り 主よ。過去を振り返ることなく、将来の救いを仰ぎ見るものとしてください。

だが、人の子が来るとき、はたして地上に信仰が見られるでしょうか。(8)

この譬話では、やもめが、その町の裁判官に訴えられていました。それは、彼女の夫が遺していった負債に関する訴訟だったのかもしれない。自分ひとりが生きていくのに精一杯のやもめにとって誰かから訴えられれば、その先、どうやって生きていけばよいのでしょうか。しかも、その町の裁判官は、訴訟相手から金をもらえば、その人に有利な判決をくだすような「不正な裁判官」でした。窮地に追い込まれたやもめは、ひっきりなしに裁判官のところに行つては、「私を訴える人をさばいて、私を守ってください」と嘆願しました。

この裁判官は、とうとう根負けしてしまい、やもめが「うるさくて仕方がないから」、彼女に有

利になる裁判をしてやろうと心に決めました。

「不正な裁判官」でさえ、昼も夜も嘆願するやもめの願いを聞き入れたのなら、「義の審判者」である神が、昼、夜祈る信仰者の祈りに聞いてくださらないわけがないのです。神は、神の恵みやあわれみを信じる信仰の祈りに聞いてくださるのですが、たとえ私たちの側に神の愛や恵みについて確信が揺らぐことがあつたとしても、熱心に願うなら、神はその熱心に目を留めて、その願いを聞いてくださるといふこともあるのです。イエスは、祈りにおける信仰とともに、熱心さをも私たちに求めていきます。主が来られるときまで、熱心に祈り求める私たちでありたいと思います。

祈り 主よ。正しい裁き主よ。あなたにうるさく感じられるほどに、しつこく祈り続ける私たちとしてください。

神よ。…この取税人のようでないことを感謝します。(11)

神に感謝することは良いことです。宮に上つて祈ったパリサイ人は「感謝の祈り」を捧げました。しかし、それは本当の感謝ではなく、自分がいかに正しい人間であるかの主張に過ぎませんでした。パリサイ人は祈りの途中で、取税人に目を向け、「この取税人のようでないことを感謝します」と言いました。パリサイ人は、主の宮に上つていながら、主の前に立つことも、自らを省みることもしない、他の人、しかも、普段見下げている人との比較の中で自分を見ていたのです。パリサイ人が捧げた「感謝の祈り」は神に受け入れられ、喜ばれるものではありませんでした。

一方の取税人は「神様、罪人の私をあわれんでください」としか祈ることができませんでした。

取税人も、自分を他の人と比べて、「私は、取税人ではありませんが、そんなにあくどい取り立てはしていません」などと言うこともできたでしょう。しかし、彼は正しく聖なる神の前で、自分の罪を認め、胸をたたいて悔い改め、神のあわれみを求めたのです。取税人の祈りは神に受け入れられました。古代から礼拝は、「主よ。あわれんでください」(キリエ・エレイソン)で始められました。神は真心からそう祈る者を「義と認めて」くださるのです。

ある人が、この箇所を読みました。「私は、このパリサイ人のようでないことを感謝します。」その人は、イエスが教えようとしていることがまだ分かっていないのです。

祈り 主よ。私の祈りに真実な悔い改めと感謝とを与えてください。

子どもたちを、わたしのところに来させなさい。(16)

秘書の留守中、ある親子連れが教会を訪ねてきたので、牧師が対応しました。秘書が帰ってきて「何人訪ねてきたのですか」と牧師に訊きました。牧師が「二人半だよ」と答えると、秘書は「おとな二人と子ども一人ですね」と訊き返しました。すると牧師は「いや、おとな一人と子ども二人だ。おとなはもう人生の半分を過ぎていますが、子どもはこれからもっと長い年月を生きるからだ。」この牧師は、子どもへの伝道を大切にしていた人でした。

「子どもには聖書は難しすぎる。深い信仰の真理を理解することはできない。」多くの人がそうした偏見を持っており、イエスの弟子たちも同じようでした。しかし、イエスは、子どもも信仰を

持つことができる。いや、おとなが子どもから信仰を習わうこともある、と言われました。子どもは自分の無力を知り、それを素直に認めます。自分にできないことはおとなに頼みます。人を見た目で判断せず、肌の色や言葉、服装が違っていても、誰とでも一緒に遊ぼうとします。子どもには、何が真実なものか、誰が自分を愛してくれる人なのかを見抜く力が備わっています。子どもは信仰の事柄を言葉で説明できなくても、そのたましいの深いところで捉えることができます。

イエスが子どもを招いておられる。そのことを覚え、おとなより長く生きる彼らを幸いな人生へと導いてあげたいと思います。

祈り 主よ。もっと多くの子どもたちをあなたのもとに導いてあげられるよう、私たちを用いてください。



「必ずこの世で、その何倍も受け、来たるべき世で、永遠のいのちを受けます。」(30)

イエスの教えに心を寄せ、自分から進んで「永遠のいのち」を求めた人がありました。それなのに、その人はイエスに従うことができませんでした。世の富への執着があつたからです。彼の求めはこの世のものを保ちながら、それに加えて来世の保証も得ておきたいという、この世と神の国との二股をかけたものでした。イエスは、「畑に隠された宝」と「高価な真珠」の譬(マタイ13・44~46)で、畑に隠された宝を見つけた人は「持っている物すべてを売り払い、その畑を買い」、高価な真珠を見つけた商人も「持っていた物すべてを売り払い、それを買い」つたと言っています。「神の国」や「永遠のいのち」の価値を本当に知るなら、そのために自分のすべてを賭ける

ことができるはずだと、主は言われるのです。この世と神の国の両方を握っておこうとする「あれも・これも」という態度ではなく、神の国のためにはこの世のものを捨ててもよいという断固とした覚悟を、イエスは私たちに求めています。「あれか・これか」の選択を迫っているのです。

しかし、イエスは、神の国を第一にする者には、「この世で、その何倍も受け、来たるべき世で、永遠のいのちを受けます」と約束しました。それは、「あれか・これか」の選択で神の国を選ぶ者は、「あれも・これも」与えられるという幸いな約束です。「まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます。」(マタイ6・33)

祈り 主よ。神の国と永遠のいのちを第一にする  
いさぎよい信仰を与えてください。

彼らにはこのことばが隠されていて、話されたことが理解できなかった。(34)

イエスは、エルサレムに向かう途中、エルサレムで受ける苦難とその後の復活について、弟子たちに何度も予告したのに、弟子たちはそれを理解することができませんでした。では、いつ、どのようなにして弟子たちはそれを理解するようになったのでしょうか。それは、予告されたことがすべて成就した後、復活した主が弟子たちにご自分を示し、聖書を説き明かした時でした。

復活されたイエスは、エルサレムからエマオに向かうクレオパともうひとりの弟子に近づき、彼らに「モーセやすべての預言者たちから始めて、ご自分について聖書全体に書いてあることを彼らに説き明かされ」、キリストの苦難と復活を教えられました。そして、二人の求めに応じて共に食事を

したとき、「彼らの目が開かれ」、二人は聖書を解き明かし、パンを裂いてくださったのがイエスであったことが分かったのです(ルカ 24・25〜32)。

二人の弟子たちに起こったことは、今日も起こります。主は今も、聖霊により、福音の説教者たちを通して、私たちに聖書を解き明かし続けています。私たちは聖書の解き明かしによって主を知るのです。そればかりでなく、「パン裂き」(聖餐)によって、復活の主が共にいることを体験するのです。説教と聖餐によって、心が燃え、目が開かれるのです。毎週の礼拝がそのような体験を求め、与えられる場でありますように。

祈り 主よ。みことばと聖餐により、私の心を燃やし、目を開き、あなたを見て喜ぶものとしてください。

その人はますます激しく、「ダビデの子よ、私をあわれんでください」と叫んだ。(39)

ガリラヤを出発してサマリアとの境を通り、エルサレムに向かったイエスと弟子たちはいよいよエリコに近づきました。エリコからエルサレムまではあと一息です。「良いサマリア人」の譬にもあるように、エリコからエルサレムに上る道は主要道路で人々の行き交うところでした。そしてエリコはエルサレムへの「門前町」で、エルサレムへの巡礼が集まる場所でした。とりわけ、過越の祭が近づいていたこの時は多くの人で混雑していたことでしょう。

この町で、イエスは二人の人物に救いを与えます。ひとりには盲人、ひとりには取税人です。どちらも、人々から軽んじられ、さげすまれていた人たちでした。人々の目は、力ある者や著名な人々に

向けられます。しかし、イエスの目は、弱さの中にある者や隠れた人々に向けられ、少数の人々やひとりひとりを大切にしてくださいさるのです。

盲人はひたすらにイエスの名を呼び、その声はイエスの耳に届きました。彼はイエスの目にとまり、イエスはその人の目を開きました。その町のほとんどの人はイエスを知っていたはずですが、しかし、イエスの名を呼んだのはこの盲人ひとりだけでした。たったひとりでも、その名を呼ぶ者があれば、主はその叫びに答えてくださいます。

ですから、あきらめずに主の名を呼び続けましょう。「主の御名を呼び求める者はみな救われる」(ローマ10・13)からです。目を開かれ、イエスの御顔を仰ぎ見ることが許されるからです。祈り 主よ。どんな時でも「私をあわれんでください」と祈れることを感謝します。

「この人もアブラハムの子なのですか  
ら。」(9)

イエスは中風の人に「子よ、しっかりとしなさい。あなたの罪は赦された」と言い(マタイ9・2)、長血を患っていた女性に「娘よ、あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい」(ルカ8・48)と言いました。イエスが自分よりも年上の人たちに「子よ」「娘よ」と呼びかけているのは不思議ですが、イエスは、「アブラハムの子」、「サラの娘」という意味で、そう呼んだのです。

ユダヤの人々は「自分たちはアブラハムの子だ」という誇りを持っていました。アブラハムが神の選びにあずかったように、その子孫である自分たちも、同じ選びにあずかっていると自負していました。しかし彼らはザアカイのような取税人

はもはや「アブラハムの子」ではないと考え、そうした人たちを軽蔑していました。ですから、イエスがザアカイの客になったとき、人々はザアカイのみならずイエスをさえ非難したのです。しかし、イエスはザアカイが悔い改めを表明したとき、「今日、救いがこの家に来ました。この人もアブラハムの子なのですから」と言いました。血筋や民族の誇りがその人を「アブラハムの子」にするのではなく、アブラハムと同じように神に信頼する者が「アブラハムの子」となり、御子イエスを信じる者が「神の子」となるのです。中風の人や長血の女性はイエスに癒やしを求め、ザアカイは「大喜びでイエスを迎える」(4節)ことによつてその信仰を示しました。

祈り 主よ。何事においても、自らに頼ることなく、あなたに信頼することを教えてください。

「だれでも持っている者はさらに与えられ、持っていない者からは、持っている物までも取り上げられるのだ。」(26)

ある教会でこのような説教を聞きました。「信仰者には神から託されたものがある。それを果たすには献身が求められる。その献身にはいくつかの段階がある。最初は自分には使命が与えられていることを知ること。次に、そのために何らかの貢献をしようとする思い。また、熱心にそれをする。さらに、人間的な熱心を超えてただ神のために、神の力によってそれを果たすこと。より高い献身の段階に進もうではないか。」

私は、きょうの箇所を読んで、その説教を思い起こしました。「ミナの譬」は「タラントの譬」と違って、十人のしもべがそれぞれ一ミナづつ、平等に受け取っています。しかし、あるしもべは

その一ミナで十ミナを得、別のしもべは五ミナを得ています。結果は違っても、主人は託されたものを活用したしもべには報いを与えています。そのしもべたちは、献身の階段をそれぞれに登っていったのだと思います。ところが一ミナを使おうとしなかったしもべは、献身の階段を一段も登ることをしなかったのです。このしもべは「あなた様は預けなかつたものを取り立て、蔭かなかつたものを刈り取られる厳しい方ですから、怖かつたのです」(21)と言いました。神の恵みや憐れみを知らず、怖がるだけのところに献身などあり得ません。神の愛と慈しみを知る者だけが、献身の階段を登り、託された使命を果たすことができますのです。

祈り 主よ。託された使命に、あなたのように身をもって応える者としてください。

「もしこの人たちが黙れば、石が叫びます。」（40）

山本有三の小説に『路傍の石』という、逆境を乗り越えていく少年吾一の物語があります。吾一のモデルは、実は作者自身です。作者は金やツテやコネで出世していく人に対して、それらの人からはじき出され、値打ちの無いもののように扱われている人々を「路傍の石」と呼びました。そして、「路傍の石」のひとりひとりに、その他大勢の中に紛れてしまうのでなく、そこから声を上げ、その存在を示せと、著者は言いたかったのでしょうか。しかし、この小説は、戦争へと突き進んでいく日本政府の検閲対象となり、未完のまま終わりました。当時の「石」は声を上げることを許されませんでした。

主イエスは、指導者たちからは「石ころ」とし

かみなされなかつた人々に、常に心からの同情を寄せていました。ご自身もまた石ころのように捨てられることを知っていたからです。それでパリサイ人に対して「もしこの人たちが黙れば、石が叫ぶ」と言ったのです。

イエスは人には捨てられました。復活によって「生ける石」となり、私たちの寄り頼むべき唯一の岩となりました。そして、この岩に頼る者をも、「生ける石」とし、霊の神殿としてくださいました（第二ペテロ2・5）。「石」にすぎなかつた私たちも、霊の神殿で「聖なる聖なる聖なる万軍の主」と叫び、「祝福あれ、主の御名によつて来られる方に」と賛美の声を上げることができるようになったのです。

祈り 主よ。私をあなたを賛美し、宣べ伝える神の家の生ける石としてください。

「『わたしの家は祈りの家でなければならぬ』と書いてある。それなのに、おまえたちはそれを『強盗の巣』にした。」(46)

教会は世のはじめから神のみこころのうちにあつた奥義で(エペソ5・32)、「わたしは…わたしの教会を建てて」(マタイ16・18)とイエスが言われたように、キリストによって建てられたもの、聖霊が住まわれる宮(第一コリント3・16)です。ところが、教会は人の集まりなのだから、そこに集まる人たちが自分たちで「こんな教会にしたい」「あんな教会にしたい」と決めて良いのだと考えるようになりました。多くの教会が、人々がそこで思い通りの活動をして自分を満足させる場となってきました。しかし、それを続けていくと、教会はもはや神のものではなく人間のものになり、かしらであるキリストから切り離

されて死体となります。聖霊が去って空き家となれば、悪霊の住処とさえなってしまう。

旧約の神殿は神の民の罪のために、最初はバビロンによって、後にはローマによって、二度も滅ぼされました。旧約の神殿に代わって、キリストはその血で教会を贖い、「あらゆる民の祈りの家」(イザヤ56・7)としてくださいました。教会から祈りが消えてしまえば、たとえ教会が神の家と呼ばれようと厳しい裁きが降っても不思議ではないのです(第一ペテロ4・17)。今こそ、私たちは教会から「強盗」を追い出し、聖なる恐れをもって、悔い改めて神のあわれみを請い、教会を「祈りの家」として捧げ直す時ではないでしょうか。

祈り 主よ。あなたの教会から香のように祈りが立ち上るようにしてください。

「何の権威によって、これらのことをしているのか」(2)

「新改訳聖書」の第一版が作られた時、出版社が「権威ある翻訳」と銘打って宣伝しました。それを知った翻訳委員会は、すぐにそれを取り消すよう申し入れました。聖書自体は権威ある神の言葉ですが、たとえ正統的な信仰に立ち、学問的良心に基づき、細心の注意を払ってなされた翻訳であつても、翻訳は自らの「権威」を主張することはできません。「権威ある翻訳」と言うよりは「聖書は権威ある神の言葉であるとの信仰に立つてなされた翻訳」と言うべきだというのが、その理由でした。「権威」は神のものであつて、人間のものではないからです。

イエスが何の権威によって宮きよめをし、そこで神のことばを語っておられるのかは、民衆がす

でに知っていました。人々はイエスの教えとみわざの中に神の権威を見ていました(ルカ4・32、36)。百人隊長はイエスの権威を認めたからこそ、「ただ、おことばを下さい」とイエスに願ひ出たのです(ルカ7・7、8)。イエスは悪霊を制し、病気を癒やすご自分の権威を弟子たちに与えています(ルカ9・1、10・19)。

祭司長たちがイエスに「権威」を問うたのは、神の家を私物化し、自らを神殿を取り仕切る「権威」としていたからです。彼らはその「権威」を弁護しようとしたにすぎません。イエスはそんな偽物の権威を恐れませんでした。真に恐るべき方は、「殺した後で、ゲヘナに投げ込む権威を持つておられる方」(ルカ12・5)だからです。祈り 主よ。あなたの真の権威を恐れ、それに服従するものとしてください。



律法学者たちと祭司長たちは、このたとえ話が自分たちを指して語られたことに気づいた。(19)

この譬の「農夫」は祭司長などのユダヤの「指導者」のことです。主人が農夫たちに「収穫」を求めたのは、神が神の民に「信仰」を求められたことを意味します。主人が遣わした「しもべ」は「預言者」のことです。神は神から離れた神の民を悔い改めに導くため預言者たちを遣わして下さったのです。神が遣わした預言者は、実際は「三人」どころでなく数多くいましたが、ここで「三」という数は、日本語で「再三」というのと同じ意味で使われ、神の忍耐が強調されています。

主人は「しもべ」に代えて自分の「愛する息子」を送りました。「どうしようか。そうだ、私の愛する息子を送ろう」という主人の自問自答

は、ご自分に逆らう神の民のために途方にくれるほどに心を配ってくださった神の御心をよく表わしています。神は熟慮の末、「愛する息子」であるイエスを送ってくださったのです。ところが、農夫は彼を「ぶどう園の外」に放り出して殺してしまいました。これはイエスを異邦人である総督に引き渡すつもりでいた彼らの計略を指しています。彼らはこんなに明確に悪を指摘されても悔い改めませんでした。ヨハネが「この方はご自分のところに来られたのに、ご自分の民はこの方を受け入れなかった」(ヨハネ1・11)と書いた通りです。現代の神の民も同じ罪を犯さないようにと祈るのみです。

祈り 主よ。あなたの恵みなしには、私たちも同じ反逆の道を歩んでしまいます。私たちを常に正しい道に導いてください。

彼らは、民の前でイエスのことばじりをとらえることができず、答えに驚嘆して黙ってしまった。(26)

イエスを総督に引き渡そうとした人々は、質問や議論をあげせかけて「イエスのことばじりをとらえ」ようとしました。彼らは、納税について質問しましたが、イエスが納税を拒否したらローマに反逆したと言いふらし、納税を奨励したらユダヤ人の誇りを傷付けたと言うつもりだったのでしょうか。

これに対するイエスの答えは「カエサルのはカエサルに：返しなさい」でした。ローマの銀貨には皇帝の横顔が刻まれていましたので、イエスは「皇帝のものは皇帝に返せ」と言われたのです。人々はイエスの答えに驚嘆し、黙ってしまいました。イエスのことばじりをとらえようとした

試みは完全に失敗しました。

イエスは彼らの企みを破つたのですが、こうした意地の悪い質問を通してでも、大切なことを教えてくださいました。イエスは「カエサルのはカエサルに」だけでなく「神のものは神に返しなさい」と言いました。銀貨には「皇帝のかたち」が刻まれています。人には「神のかたち」が刻まれているということを教えたのです。人は、神のかたちに造られました。キリスト者は、まことの「神のかたち」であるイエス・キリストに似せて再創造されました。ですから、信仰者は納税をはじめとするこの世の義務を果たすだけでなく、みずからを神に捧げて生きることを求められているのです。

祈り 神のかたちとして造られた私を、主よ、あなたの似姿へと変えてください。

どうしてキリストがダビデの子なのでしょう。(44)

納税についての質問のあと、サドカイ人が復活について質問してきました。サドカイ人は復活を信じていなかったたので、この質問はイエスから答えをもらうためというよりは、イエスを困らせようとするものでした。イエスはユダヤの人々にとっての最高の権威であるモーセを引用し、復活が聖書の教えであることを論証しました。サドカイ人の質問は、かえってサドカイ人を不利にするだけでした。イエスは復活を論証しただけでなく、やがてご自分の復活によって、それを証明するのです。私たちはイエスによって復活を論証され、証明された真理として信じています。

今まで質問攻めにあっていたイエスですは、今度はイエスのほうから律法学者たちに質問をし

した。それは「ダビデがキリストを主と呼んでいるのです。それなら、どうしてキリストがダビデの子なのでしょう」というものですが、イエスはなぜこんな質問をしたのでしょうか。

人々がキリストを「ダビデの子」と呼ぶのは、キリストがダビデ王朝から出る王であるからです。けれども「ダビデの子」という名はダビデ王朝の復興やローマからの独立といった政治的、民族的なものを連想させます。しかし、イエスが成し遂げようとしている救いは、もつと霊的、普遍的なものでした。政治的な王としてイエスを担ぎ出そうとする民衆に対して、「ダビデの子」であるメシアよりも「ダビデの主」であるキリストを、イエスは指し示そうとしたのです。

祈り 主よ。あなたを王の王、主の主、いと高きお方として仰ぐ信仰を与えてください。

そして、ある貧しいやもめが、そこにレプタ銅貨を二枚投げ入れるのを見て：(2)

きょうの箇所はルカ 20章の最後と 21章の最初にまたがっています。それはこのふたつの箇所が繋がっているからです。20章の最後には律法学者たちを警戒するようにとの教えがあります。律法学者は、聖書を書き写し、それを研究する人々のことで、ユダヤの社会では大変尊敬されていました。神のことばに仕える者がそれにふさわしい尊敬を受けることは間違つてはいませんが、彼らはそれを自分の榮譽や利益を得るために使ったのです。彼らの悪行のひとつに「やもめの家を食い尽くし」(47)とあるのは、貧しい人々を助けるようなふりをして、実際は謝礼金を搾り取るような行為をさしているのだと思われます。

イエスはその目を「律法学者」から律法学者に

食い物にされかねない「やもめ」に向けます。そして、その日の生活費のすべてを捧げたやもめの真実を誉めました。献金の尊さは額にはよりません。年に数十万ドルも収入のある人が十分の一の何万ドルかを捧げても、残りのお金で十分過ぎるほどの生活ができます。しかし、年に数万ドルしか収入のない人が何千ドルかを捧げるのは大変なことです。そして、そのどちらが神の目に尊いかは言うまでもないことです。

私たちの回りには、警戒すべき生き方と、見習わなければならぬ生き方のふたつがあります。主が、どの生き方に厳しい目を向け、どの生き方に温かいまなざしを注いでくださっているかを見分けていきたいと思えます。

祈り 主よ。目立たぬ人々の中にある真実な信仰に目を向けさせてください。

それは、あなたがたにとって証しをする機会となりません。 (13)

イエスの時代の神殿は、ヘロデ王がユダヤ人の歡心を買うため、再建された神殿に修復を重ねたもので、黄金がふんだんに使われ、壮麗に飾り立てられていました。それに見とれていた弟子たちに、イエスは「この神殿も滅ぼされる」と予告しました。実際、紀元70年に神殿はあとかたもなく滅ぼされました。神殿崩壊は、世の終わりへの一里塚でしたので、イエスはそのことに重ねてキリスト來臨の預言を語りました。

イエスはその預言の中で弟子たちに迫害に対する心構えを教えました。迫害が起こるのは福音が宣べ伝えられるからです。イエスの弟子たちがしたことがメシア待望のブームだけだったとしたらそれはイエスの死とともに終わり、迫害は決して

起こりませんでした。ところが弟子たちは、彼らの生きている世代、神殿崩壊の70年までの間の40年間に、ローマ帝国のあらゆるところに福音を広め、福音によって文字通り世界を変えてしまったのです。移り変わりのめざましい現代ならいざ知らず、古代にたつた40年でその後の歴史を塗り替える大きな変化が起こったのは、まさに神の御業としか言いようがありません。弟子たちはイエスの教えの通り迫害に耐え、迫害さえも福音を証しする機会としました。私たちも、イエスの言葉に聞き、初代のキリスト者たちの証しに学び、困難にくじけて主のための働きをやめてしまうのではなく、「困難」を「好機」として、前進したいと思えます(第二テモテ4・2)。

祈り 主よ。あなたを証しすべき時に証しをする勇気を与えてください。

「身を起こし、頭を上げなさい。あなたがたの贖いが近づいているからです。」(28)

「贖い」にはふたつの段階があります。第一は罪を犯してその奴隷となっていた者が、その負い目を支払ってもらい、罪を赦され(エペソ1・7、コロサイ1・14)正しい者とされ、神の子とされ(ガラテヤ4・5)、むなしき生き方から意義ある生き方へ(第一ペテロ1・18)、不法から良い行いへ(テトス2・14)と変えられていくことです。

もうひとつは、私たちのからだがキリストの復活のからだと同じように朽ちないものに変えられていく、「からだの贖い」です。それは、「終わりのラツパとともに、たちまち、一瞬のうちに変えられます。ラツパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです」

(第一コリント15・52)とあるようにキリストの再臨の時に実現します。イエスを信じる者は、第一の贖いによって、罪の咎めから救われますが、第二の贖いによって罪の存在そのものからも救われます。

イエスは、すでに贖われた者に、その喜びに生きるとともに、「身を起こし、頭を上げ」て第二の贖い、つまり贖いの完成を待ち望むように教えてください。弟子たちはみな、この希望に生きました。ローマ8・23に「それだけでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、子にしていたくこと、すなわち、私たちのからだ贖われることを待ち望みながら、心の中でうめいています」とある通りです。

祈り 主よ、うめくほどに贖いの完成を待ち望ませてください。。。

その日が畏のように、突然あなたがたに臨むことにならないように、よく気をつけなさい。(34)

多くの人々が来臨の日を「計算」して、何年、何月、何日であると言つてきましたが、その通りにはなりませんでした。キリストの来臨は特定の人だけに知らされることではなく、それには前兆や「しるし」が伴い、それは、すべての人がその目で見ることのできる出来事です(ルカ 17・23～24)。

しかし、「天地は消え去ります。しかし、わたしのことは決して消え去ることがありません」(33)とあるように、イエスの言葉つまり、神の言葉である聖書によらなければ、前兆やしるしを、たんに自然や社会の現象としてとらえるだけで、それが指し示しているものを見ることはできません。また、たとえ聖書を知っていたとして

も、その心が「放蕩や深酒や生活の思い煩いで押しつぶされ」(34)、御言葉に心を留め、御言葉が教えるように生きていなければ、その人にとつて、再臨は「畏のように、突然に」臨むものになるのです。それでイエスは、「いつも目を覚まして祈つていなさい」(36)と言われたのです。

世の終わりには人々の信仰や愛が冷え、祈りが乏しくなります。世の終わりが近づけば近づくほど「目を覚まして祈つて」いなければならぬのに、祈りが途絶えてしまうのです。しかし、それもまた来臨のしるしのひとつです。それに気付いている私たちは、だからこそ、目覚めて祈る必要があるのです。

祈り 主よ。祈りが乏しくなるこの時代だからこそ、私たちにもっと熱心に祈ることを教えてください。

ユダは承知し、群衆がいないときにイエスを彼らに引き渡そうと機会を狙っていた。(6)

罪や悪はいつも、人を誘惑する「機会」を狙っています。誘惑の多くはそれ自体は悪くないと思えるようなところに隠れています。たとえば、間違ったことが行われていることに腹を立てる「義憤」は、正義を守るために必要なものです。しかし、怒りの感情に支配されてしまうと、独善的な行動に走る危険があります。それで、聖書は「怒っても、罪を犯してはなりません。憤ったままで日が暮れるようであってははいけません。悪魔に機会を与えないようにしなさい」(エペソ4・26~27)と戒めています。

キリストを信じる信仰の生き方には、戒律の束縛はありませんし、今日の社会では信仰の「自由」も与えられています。「自由」は尊く、守る

べきものですが、それが同時に怠惰や放縦への入り口になることもあります。私たちは「その自由を肉の働く機会としないで、愛をもって互いに仕え合いなさい」(ガラテヤ5・13)との教えに従って、誘惑を斥けなければなりません。

「悪魔に機会を与えない」ためには、「自分がどのように歩んでいるか：細かく注意を払い：知恵のない者としてではなく、知恵のある者として、機会を十分に活かす必要があります(エペソ5・15~16)。私たちが活かすべき「機会」は「善を行う」機会です。「機会があるうちに、すべての人に、特に信仰の家族に善を行いましう」(ガラテヤ6・10)と教えられているように、善を行う機会を逃さないようにしましょう。祈り 主よ。悪をなす機会ではなく、善を行う機会を求めさせてください。



過越が神の国において成就するまで、わたしが過越の食事をすることは、決してありません。(16)

イエスが弟子たちと守った「最後の晩餐」は「過越の食事」で、「過越の食事」は、神がイスラエルをエジプトの奴隷から救われたことを記念する、ユダヤの人々のためのものでした。しかし、イエスはそれに新しい意味を与え、イエスご自身が過越の「子羊」となって身代わりの死を遂げ、全人類を罪の奴隷から救い出してくださいましたことを覚える、最初の「主の晩餐」(聖餐)となされたのです。旧約の「過越」は「神の子羊」イエスによって成就しました。したがって、聖餐は「過越の子羊」であるキリストがすでに屠られ、救いが成就したことを告げるものなのです(第一コリント5・7、第一ペテロ1・18～19)。

しかし、イエスは「過越が神の国において成就する」時についても語っておられます。これは世の終わりに、神の救いのみわざがすべて完成し、花嫁である教会が花婿であるキリストに迎えられ、神の国で「子羊の婚宴」(黙示録19・9)が催されることを指しています。キリストの昇天後、再臨の時まで、教会は試練の中に置かれますが、やがての日に栄光にあずかります。聖餐は、その間も主が教会と共におられることを示し、信仰者を励まし続けてきました。それは、聖餐が、今から二千年前の十字架を振り返るだけのものではなく、神の民がやがて与る「天の宴」を、この地上であらかじめ祝う、希望に満ちたものだからです。

祈り 主よ。あなたの晩餐に与るたびに、「主が来られる時」を待ち望むことができますように。

ゴルゴタの宝石

ゴルゴタの丘に

イエスさまの流された

聖い血潮が

天の光を受けてキラキラ

輝いている

この世で最も残忍で醜いものが

繰り広げられた丘に

あの日

神のみ子が十字架にかかった

あの日

暗黒の雲に被われた

ゴルゴタの丘に流された

罪のないお方の聖なる血潮が

醜い人間の罪を洗い流す

神の愛と力をちりばめた

美しい宝石となつて輝く

罪の赦しという

世にふたつとない

この高価な宝石は

すべての人が無償で得られる

不思議な宝石

無限に掘り出される

救いの恵みに輝く宝石

これを自分の信仰の手を出して  
いただく者は

この世の闇からも

永遠の滅びからも救われて

消えない希望と揺るがない平安と

天に繋がる幸いに生きることが

できる

二十一世紀の今も

神の愛と力で

輝きつづけているこの宝石

ゴルゴタの丘から



**Penguin Club**

[www.penguinclub.net](http://www.penguinclub.net)